

私たちは、生まれた年代や場所、環境など自分では選べなかったものや、身体的特徴、これまでに経験してきた過去の事象など、変えられないものを背負いながら生きています。こうしたことを一般的に「宿命」と言います。時には、自身の宿命を他人と比べて嘆くこともあるでしょう。しかし、宿命を自らの個性と受け止め、前向きに未来を見つめた時、逆境やハンディはマイナスではなくっていくのです。

江戸時代の中期に活躍した国学者の塙保己一は、幼少期に病によって視力を失いました。しかし、氏は、失明という大きなハンディを背負いながらも学問を志し、「群書類従」という国学、国史を主とする古典記録を収集、分類し、体系的にまとめるという偉業を成し遂げました。

当時、古典文献は、各地に散らばり、寺や旧家がそれぞれに保管していました。しかし、そのような状況は、火災や戦乱によって文献を消失する恐れがあり、危機感を持った塙保己一は、後世に貴重な資料を残すことを目指したのです。

自ら文献を読み解くことができない氏は、弟子や協力者に原本を読んでもらい、その内容を注意深く聞き取りながら修正や分類をし、構成は口頭で指示を出しながら編纂に取り組みました。編纂に要した年数は約四十年、その量は、一二七三種、五三〇巻、六六六冊にも上ります。

もし、氏が失明したことを人生の制約と受け取り、この大事業に挑戦していなければ、



宿命を受け入れ 未来を切り開く

ば、我が国の貴重な記録は、今を生きる私たちに残されていなかったかもしれません。氏は、「このままでは日本の歴史や文化の根拠が失われてしまう」という危機感を「誰かがやるだろう」ではなく、「失明していても、自分にできる役割がある」と主体的に捉えて大事業に挑戦しました。

できないことを嘆くのではなく、できることに最大限に取り組んだ氏は、視覚に頼れない代わりに聴覚と記憶力を鍛え、書物を「聞いて理解する」学び方を身に付けました。また、身体的な制約があるが為に、分業体制を確立し、他者の協力を得ながら事業を進めていく仕組みを確立していきました。この氏の姿勢と取り組みによって、失明という宿命は、人生を閉ざす不利な出来事ではなく、自分自身の「使命」を明確にし、「群書類従」を世に残す大きな原動力となつて、未来を切り開いていったのです。

思い通りに行かない状況に陥ったり、逆境に身を置くと、つい自分や他者の能力不足を責めたり、環境や時代に責任を求めたりしてしまいがちです。しかし、過ぎたことを後悔し続けていても事情は好転しません。変えられないことを事実として受け止め、その意味や活かし方に目を向けると、好ましくない状況も、より良い未来を切り開いていくチャンスに変わっていくのです。どのような過去も、その全てが今の自分を作り上げています。変えられない宿命を前向きに受け止めることが、今の自分の命を輝かせることになるのです。